

親密な関係の社会心理学 (1) : 共同的関係と交換的關係

諸 井 克 英

1. はじめに

われわれは、日常生活の中で、さまざまな人たちとの関係を営んでいる。そのような対人関係は、経済的市場に似た一種の市場を形成していると考えられる。対人関係市場では、さまざまな対人的相互作用が報酬の価値に還元され、一定の規範や原理に従って交換の公正さが判断される。そのような問題を扱う代表的理論として衡平理論を挙げることができる (Walster *et al.*, 1978)。経済的交換と類比し易い仕事上の関係や未知者との相互作用などとは異なり、恋愛関係や夫婦関係に代表される親密な関係においては、衡平原理が適用されないという立場がある。つまり、関係に伴う利得とコストへの注意はむしろ関係の維持・発展の妨げとなり、親密な二者の間の交換は、別の原理によって支配されていると考えられる。

Rubin (1973) によれば、交換原理は対人的絆が強固になった段階よりも関係進展の初期段階によくあてはまる。Walster *et al.* (1978) も、短期の関係のほうが、a) 自他のインプットおよびアウトカムの査定が容易であり、b) 具体的、特殊的なものが交換されるので査定値が明確である、という理由で、つきあいの浅い関係のほうが衡平計算が簡単であると提起している。したがって、つきあいの浅い関係にのみ、衡平理論が適用可能であるとも考えられる。

Lloyd *et al.* (1982) は、男女大学生を対象として、親密な関係よりもつきあいの浅い関係のほうで TMI (Total Mood Index) に対する衡平性の予測力が高いことを認めた。夫婦を被験者とした Matthews & Clark (1982) の研究では、自己に対する相手の理解・受容についての認知が希薄であるときのみ、衡平性の認知と関係満足度との間に 2 次的関係が生じた。直接に衡平性の問題を扱っているわけではないが、Murstein *et al.* (1977) も以上の研究と一致

した知見を提出している。社会的交換志向の強い者同士の組み合わせは、夫婦関係には結婚上の不適応をもたらし(ただし、夫のみ)、大学生の同性友人関係ではむしろ友情を高めた。

しかし、関係進展の初期段階でのみ衡平理論が適用可能であるという考えやそれを支持する研究知見は、恋愛・夫婦関係を対象とした諸研究での結果と矛盾する(諸井・小川, 1987参照)。さらに、家族のライフ・サイクルの後期になるほど夫婦関係を衡平であると認知する者の割合が増加する傾向にあることを見出した研究もあることから(Schafer & Keith, 1981)、この二者の関係進展度の影響は衡平理論にとって重要な問題といえる。

連帯性志向集団における平等分配選好を指摘した Deutsch (1975) に従っても、親密な関係では衡平性よりもむしろ自他のアウトカムの一致度である平等性のほうが支配的であると考えられる。Cate *et al.* (1982) は TMI, Michaels *et al.* (1984) は関係満足度について、衡平性ととも平等性も予測子となり得ることを見出した。既婚の男女大学生を被験者とする Peterson (1981) の研究では、衡平利得者のうちアウトカムに加えインプットも自他同一である者の幸福感および関係の安定性が高かった。

本論文では、親密な関係では親密さに乏しい関係とは異なる関係規範が作用しているという Clark の考えに焦点をあてる。つまり、共同の関係と交換的關係の区別に関する一連の実験的研究を詳細にレビューすることによって、親密な関係における社会的交換過程を維持する心理学的機制に関する有益な視座を得る。

II. 共同の関係と交換的關係

Clark & Mills (1979) は、二者の交換(利得を与えることと受け取ること)を支配する規則あるいは規範に基づき、2つのタイプの関係、すなわち共同的关系と交換的關係を区別している。共同的关系は、相手の安寧に対する責任の相互的感情によって特徴づけられる。利得が、相手の欲求に応じて与えられたり、特定の見返りを期待せずに相手を満足させるために与えられる。このような関係は、家族関係、恋愛関係、あるいは親友関係によって代表される。一方、交換的關係では、お互いの欲求に対する特別の責任が感じられない。むしろ、過去に受け取った何らかの利得によって生じた借りを返すためや、将来に特定のお返しを受け取ることが期待して、利得が供与される。このような関係は、

未知者，ちょっとした知り合い，および仕事上のつきあいなどによって，代表される。

ここでは，2つの関係タイプに対する経験的証拠が，次の観点から詳細にレビューされる。a) 交換的關係に適切な行動，b) 共同的關係に適切な行動。

1. 交換的關係に適切な行動

交換的關係における公正さや正当性の認知は，関係当事者双方の間で交換される利得のバランスを配慮する行動と結びついているはずである。そのような行動として，a) 供与された特定の利得に対する即座の返報，b) 供与した利得に対する返報の要求，c) 相応する利得の供与，d) 共同課題での個々のインプットを覚えておくこと，などが挙げられる。これらの行動は，共同的關係よりもむしろ交換的關係に対する願望を示すと，関係当事者によって解釈される。したがって，共同的關係における交換的行動は，ネガティブな反応を生じ，ふつうは回避されるだろう。

(1) 供与された特定の利得に対する即座の返報

供与された特定の利得に対する即座の返報は，交換的關係においては正当性の認知を促進するが，共同的關係ではむしろ苦悩をもたらすだろう。

① Clark & Mills (1979, 実験1) の研究

この研究は，Fig. 1 に示す手続きで行われた。Table 1 に示すように，交換的關係を望むように導かれた被験者は返報が生じたときに，共同的關係を望むように導かれた被験者は返報がないときに，サクラに対する好意を表明した。

ところで，これらの結果は，“男性が利得を女性に与え，女性は，それを喜んで受け入れ，返報しようとするべきでない”という伝統的規範によっても説明可能である。また，男性被験者は，相手の女性から何らかの性的返報を期待しているのかもしれない。しかし，次に述べる実験では，共同的關係が同性に対して期待される条件が設定されている。

② Clark & Waddell (1985) の研究

この研究では，2つの関係タイプによって搾取の認知が異なることが明らかにされた。仮説は，次の通りである。仮説 a: もしも相手と共同的關係が期待されるならば，与えられた好意に対する返報を相手が申し出ないことは，搾取の認知に影響しない。仮説 b: もしも相手と交換的關係が期待されるならば，

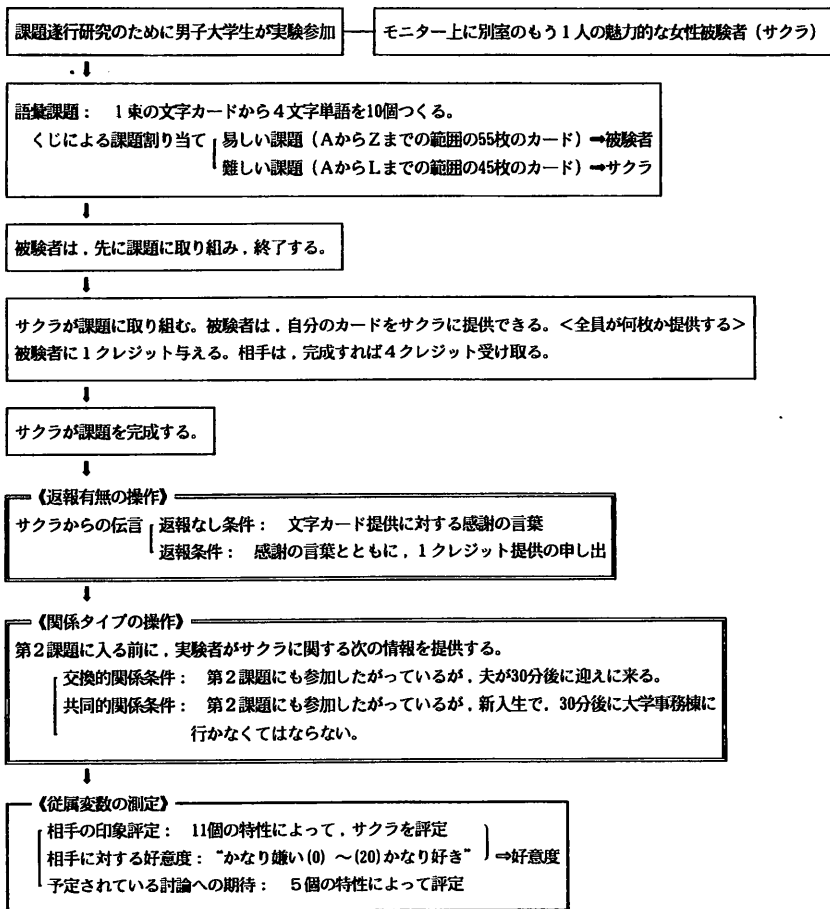


Fig. 1 Clark & Mills (1979, 実験1) による実験の概略図

Table 1

サクラに対する好意度の条件別平均値 (Clark & Mills, 1979, 実験1より)

	返 報	返報なし	[分散分析]
共同的關係	177 ← a → 194		交互作用 $p < .01$ 下位検定 a, b ともに $p < .05$
交換的關係	193 ← a → 176		

各セル: $N=24$

得点範囲: 高好意度 (240) ~ (0) 低好意度

与えられた好意に対する返報を相手が申し出ないことは、搾取の認知を高める。ここでは、搾取認知が高まるほど、相手に対する魅力が低下すると予測された。

実験では、女性被験者は、交換的關係あるいは共同的關係を望むように操作された魅力的な女性のサクラとペアにされた。サクラは、クラス・プロジェクトのための長い質問紙に回答するように被験者に頼んだ。その後、協力に対する金銭的謝礼の有無が操作された。結果を Table 2 に示す。交換的条件では、金銭的謝礼は、搾取感情を妨げ、相手に対する好意を高めた。対照的に、共同的關係が望まれているときには、金銭的謝礼は、搾取の感情や好意に対して何の影響もおよぼさなかった。

Table 2
搾取認知とサクラに対する魅力に関する条件別平均値
(Clark & Waddell, 1985より)

	《搾取認知》		《魅力》	
	返報	返報なし	返報	返報なし
共同的關係	11.5	14.1	152.0	152.0
交換的關係	10.7 ← a →	19.3	168.3 ← b →	138.2
[分散分析]	返報性の主効果 $p < .05$ 下位検定 a : $p < .01$		返報性の主効果, 交互作用 $p < .05$ 下位検定 b : $p < .025$	

各セル: $N=10$

得点範囲: [搾取認知] 高搾取 (40) ~ (0) 低搾取; [魅力] 高好意度 (200) ~ (0) 低好意度

したがって、仮説 b については、Clark & Mills (1979) の研究と同様に支持された。しかし、仮説 a については、Clark & Mills (1979) と一致する結果が得られなかった。Clark & Waddell (1985) は、この理由として、先行研究との 3 つの差異を指摘している。a) 返報の申し出を相手が行っているため、返報による拒絶感や困惑が小さい。b) 返報は授業予算に基づいており、個人的なコストを伴わない。c) だれにでも返報を行っている。

(2) 供与した利得に対する返報の要求

相手に与えた利得に対して返報を要求することは、交換的關係においては適切とみられるが、共同的關係においてはそうでない。

Clark & Mills (1979, 実験 2) の研究では、Fig. 2 に示すような手続きで、次の 4 つの仮説が検討された。仮説 a: 他者によって援助された後にその他者に利得を要求することは、交換的關係が期待されているときには、高い魅力を

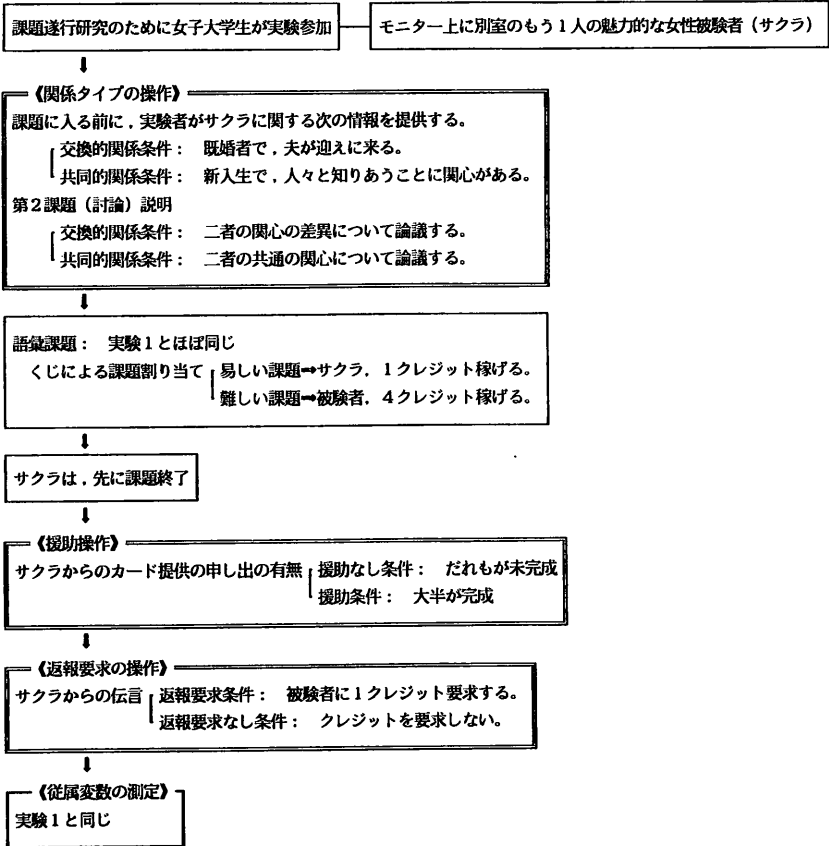


Fig. 2 Clark & Mills (1979, 実験2) による実験の概略図

もたらず。仮説b: 他者によって援助された後にその他者に利得を要求することは、共同的關係が期待されているときには、魅力を低下させる。仮説c: 他者からの援助がないのに利得を要求することは、交換的關係が期待されているときには、魅力を低下させる。仮説d: 他者からの援助がないのに利得を要求することは、共同的關係が期待されているときには、高い魅力をもたらす。

結果を Table 3 に示す。相手からの援助があった場合に関する仮説 a と b については支持された。つまり、交換的關係が望まれている場合には返報を要求されたときに、共同的關係が望まれている場合には返報の要求がないときに、サクラに対する好意が生じた。また、相手からの援助がない場合は、次のよう

な傾向が得られた。交換の関係が期待されているときの援助要求は、相手の魅力を低下させ、仮説cが支持された。しかし、共同の関係が期待されるときの仮説dについては、支持されなかった。これは、先に自分を援助してくれなかったにもかかわらず、援助を要求している相手の意図に関する疑念が、被験者に生じたためと考えられる。

Table 3

サクラに対する好意度の条件別平均値 (Clark & Mills, 1979, 実験2より)

	援助— 返報要求	援助— 返報要求なし	援助なし— 返報要求	援助なし— 返報要求なし	[分散分析]
共同の関係	156 ← a → 191		179	177	関係タイプの主効果 $p < .05$ 三重交互作用 $p < .001$ 下位検定 a : $p < .01$
交換の関係	173 ← b → 149		149 ← b → 173		b : $p < .05$ c : $p < .06$

各セル : $N = 10$

得点範囲 : 高好意度 (240) ~ (0) 低好意度

(3) 相応する利得の供与

交換の関係においては、供与された利得が過去に受け取った利得の返報であるように知覚させるどのような変数も、ポジティブな反応を生じるはずである。たとえば、過去に受けた利得に完全に相応している利得を与えることは、返報としてみられるであろう。交換の関係では、特定の負債が返報されることが期待されているのである。対照的に、相応していない利得は、共同の関係において好まれるだろう。というのは、返報として認知されることはなく、相手の欲求を充たすために与えられたと見做されるからである。

Clark (1981) の一連の研究 (実験1, 2, 3) は、これらの考えを支持する証拠を提供している。最初の2つの研究では、被験者は、一方の人物が他方に何かを与え、それから他方が一方に何かを与えるというシナリオを読み、二者の関係を推測する (二者は友だちではない (0) ~ (4) 二者は親友である)。

実験1では、車で家まで送ることと昼食をおごることを用い、二者の間で相応した利得の交換 (車 → 車, 昼食 → 昼食) と相応していない利得の交換 (車 → 昼食, 昼食 → 車) のいずれかが生じている4つのエピソードを作成した (Table 4参照)。大学生にこれらのうちの1つのエピソードを呈示し、二者の関係を推測させると、相応しない利得の場合のほうがそうでない場合よりも二

者が親しい関係にあると認知された（非相応利得条件2.6；相応利得条件2.0； $p < .005$ ）。しかし、この実験で用いた利得が仕事仲間同士に特有のものであるために、このような結果になったのかもしれない。

Table 4

エピソードの例：非相応利得—ランチ先行条件（Clark, 1981, 実験 1 より）

ジョン・クラーク氏が時計を見ると、12時15分であった。昼食時間であった。彼は、スティーブ・スミスのところへ電話をした。スミス氏が電話に出た。
 “やあ、スティーブ・スミスだけれど。”
 “ああ、ジョン・クラークだけれど、昼食を取ったかい。”
 “まだだ”とスティーブ・スミスが答えた。
 “それでは、昼食をおごってあげよう。15分後に角で待ち合わせよう。”と、彼は言った。
 “じゃあ、すぐに”と言って、彼は、電話を切った。
 次の日に、スティーブは、夕方の5時にジョンに電話をかけた。
 “スティーブ・スミスだけれど、今日は、家まで車で送ってあげるよ。5時半にどうだい。”とスティーブは、尋ねた。
 “いいよ、じゃあ、すぐに”と、ジョンは答えた。

次の実験では、同じ寮に居住する学生同士（男性同士、女性同士）での利得の交換（ペン、メモ帳、コーヒー、キャンディー）を対象とした（Table 5 参照）。さらに、返報の遅延も操作された（同じ日、5日後）。しかし、Table 6 に示すように、遅延の効果はなく、実験 1 と同様に相応性の効果のみが認められた。

Table 5

エピソードの例：非相応—中程度遅延条件（Clark, 1981, 実験 2 より）

フレッドとジムは、寮の同じ階に住んでいる。月曜日に、フレッドは、疲れたので、インスタント・コーヒーをジムに頼んだ。ジムは、フレッドに小さなコーヒーポットを渡した。土曜日に、フレッドは、2本のフェルトペンを与えた。

Table 6

二者の親しさに関する条件別平均値（Clark, 1981, 実験 2 より）

	短期遅延	中程度遅延	[分散分析]
相応利得	9.10	9.07	相応性の主効果 $p < .03$
非相応利得	10.48	9.95	

各セル： $N=40$

得点範囲：親友である〈4〉～〈0〉友だちでない

実験3では、実験2で用いたエピソードを大学生に呈示し、返報の理由を挙げさせた。実験条件を知らない2人の判断者によって、これらの反応の共同の関係志向性と交換の関係志向性が評定された。Table 7に示すように、相応していない返報は共同の関係志向性に基づく反応であると判断され、相応した返報は交換の関係志向性に基づく反応であると見做される傾向がみられた。

以上にみたように、相応する利得の交換は、交換の関係における正当性の感覚を達成することによって重要であるが、共同の関係においてはそうではない。

Table 7

交換志向性得点と共同志向性得点に関する条件別平均値 (Clark, 1981, 実験3より)

		相応性		[分散分析]
		非相応	相 応	
短期	交換志向性得点	1.33	2.69	両得点ともに、 相応性の主効果 $p < .001$
	共同志向性得点	1.86	.69	
長期	交換志向性得点	1.55	2.69	
	共同志向性得点	1.83	.36	

各セル: $N=18$

得点範囲: 4つのエピソードのうち、当該の志向性に判断された数(4~0)

(4) 共同課題での個々のインプットを覚えておくこと

交換の関係規範によれば、人々は、課題へのインプットに比例して利得を受け取るべきである。このように利得を分配するためには、インプットを覚えておくことが必要である。対照的に、共同規範は、必要度の高い人がより多くの利得を受け取ることや、欲求が同じときには利得が平等に分配されるべきであることを示している。この規範に従うためには、個々のインプットを覚えておく必要はない。

① Clark (1984, 実験1, 2, 3) の研究

次の2つの仮説を検証するために、一連の実験が行われた。仮説a: 交換関係を営んでいたり望んでいる人々は、共同課題へのインプットを覚えようと試みるだろう。仮説b: 共同関係を営んでいたり望んでいる人々は、共同課題へのインプットを覚えようと試みないであろう。

実験1が、次のように行われた。男性被験者は、魅力的な女性(サクラ)と共同報酬課題に従事した。課題は、数字マトリックスから特定の数字連鎖を探し、カラーペン(赤色, 黒色)で○印をつけることであった。くじによってサ

クラが別室で先に数字連鎖課題に従事することになり、その間、被験者は別の課題に取り組みました。その後、個人的属性などに関する質問紙への記入を求められ、クラの回答を添付することによって関係タイプの操作が行われた（共同的関係条件：独身，大学新生，人々に会うのに興味があるために実験参加；交換的關係条件：既婚，1年間大学で過ごした，夫が迎えに来るのを待つ間に実験参加）。被験者は、この後、クラが取り組んだ数字連鎖課題の続きを行うように支持された。従属変数は、その時にクラが使用した色と同じのカラーペンで被験者が○印をつけたかどうかである。結果をTable 8に示す。交換的關係条件におかれた被験者は、課題での個々のインプットが明確になるように、クラが使用した色とは異なるカラーペンを使用する傾向にあった。逆に、共同的関係を望むように操作された被験者は、お互いのインプットが曖昧になるような仕方で行動した。つまり、仮説aとbが支持された。

Table 8

クラとは異なる色のカラーペンを使用した被験者の割合 (Clark, 1984より)

	共同的関係		交換的關係
実験1 N=33*	12.5%	← $p < .01$ →	88.2%
	↑ ≠50%, $p < .01$		↑ ≠50%, $p < .01$
実験2	42.0%	← $p < .01$ →	94.4%
	N=17		↑ ≠50%, $p < .01$ N=18
実験3 各セル：N=10ペア	30.0%	← $p < .01$ →	90.0%
			↑ ≠50%, $p < .01$

*：各セルへの配分は不明

しかし、実験1の共同的関係条件の被験者の行動について、次の代替仮説が考えられる。彼らは、交友形成を促進するためにお互いのインプットを覚えることを回避しているのであり、交友が形成された後の段階では交換的關係規範に従いお互いのインプットを覚えるよう行動するかもしれない。この代替解釈の可能性を検討するために、次の2つの実験が行われた。実験2と3では、被験者は、友人と参加した（共同的関係）。未知者と組み合わせられた条件も設定された（交換的關係）。ただし、実験2では別室で課題に取り組むが、実験

3では同じ部屋で同時に課題に取り組んだ。Table 8 に示すように、これらの実験でも、交換的關係にある者は、共同的關係にある者に比べて、課題での個々のインプットを明確にするよう行動した。つまり、代替解釈が棄却された。しかし、共同的關係にある被験者の傾向は、仮説bを支持していなかった。これは、次のことを示唆する。交換的行動（ここでは、個々のインプットの明確化）の回避は、共同的關係が未確立であるときには重要であるが、そのような關係が確立しているときにはもはや重要ではなくなる。

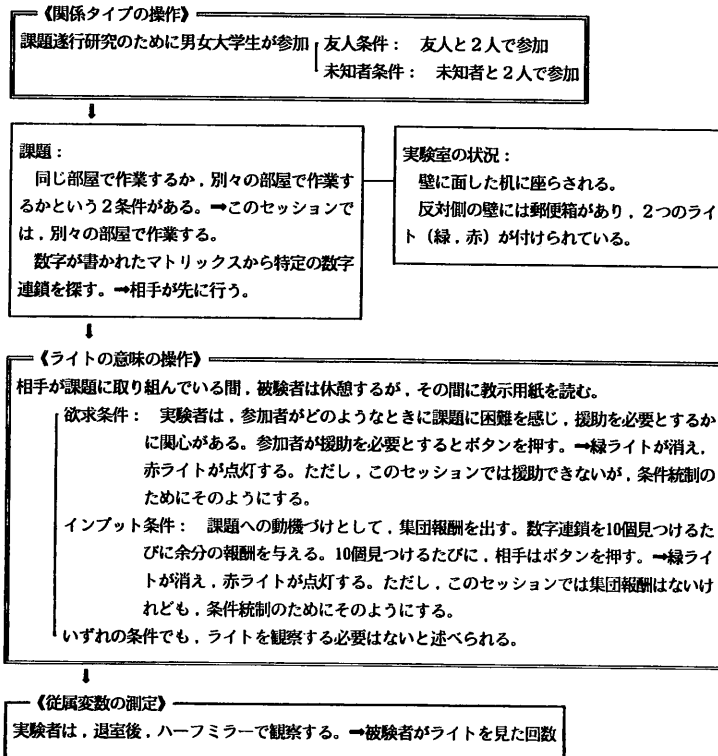


Fig. 3 Clark et al. (1989) による実験の概略図

② Clark *et al.* (1989) の研究

この研究では、友人同士と未知者同士のペアを用いることによって、交換的関係でのインプットの明確化とともに、共同的関係においては相手の欲求に注意を向ける傾向があることも示された。仮説は、以下の通りである。仮説 a : 進行中の交友関係の成員は、未知者同士よりも、相手の欲求を覚えようとする傾向にある。仮説 b : 未知者同士は、進行中の交友関係の成員よりも、共同報酬課題への相手のインプットを覚えようとする傾向にある。

実験は、Fig. 3 に示す手続きで行われた。Table 9 に示すように、仮説 a, b は、明確に支持された。

Table 9

ライトを見た回数に関する条件別平均値 (Clark *et al.*, 1989より)

	友人		未知者	[分散分析]
[ライトの意味]				対数変換 : $\log(X+1)$
インプット	1.31 (N=13)	← a →	3.78 (N=9)	交互作用 $p < .001$
欲求	4.36 (N=11)	← a →	1.00 (N=9)	下位検定 $a: p < .01$

2. 共同的関係に適切な行動

共同的関係においては、相手の欲求や期待に対する特別な義務感情を反映している行動が適切であると見做される。これらの行動として、以下のものが挙げられる。a) 援助供与、b) 援助供与による気分と自己評価の高揚、c) 相手の欲求を覚えておくこと、d) 相手の情動表出に肯定的に反応すること、e) 相手に対する積極的な情動表出。

(1) 援助供与

援助供与は、他方の安寧に対する関心を証明するので、交換的関係よりも共同的関係において、より期待され、よりしばしば生起するはずである。さらに、交換的関係での援助供与は、相手と同じやり方で返報できるかに関わっているが、共同的関係ではそうでない。

Clark *et al.* (1987, 実験2) の研究では、魅力的な異性と共同的関係を望むように操作された被験者は、交換的関係を望むように操作された被験者よりも、その相手を援助するために多くの時間を費やした。この実験の詳細は、後

述の“相手の情動表出に肯定的に反応すること”の箇所述べられる。

(2) 援助供与による気分と自己評価の高揚

(1)では、交換的關係よりも共同的關係を望んでいる者が相手の欲求を充たしたいという大きな動機づけをもつことが示唆された。また、先にみた交換的關係規範への遵守に関する研究は、次のことを示唆する。交換的關係よりも共同的關係を望んでいる者は、援助した後に相手に返報を期待しない傾向にある。これらの理由から、次のように推測される。共同的關係を望んでいる者は、相手への援助供与に対して肯定的に反応するはずである。同様に、共同的關係を望んでいる者は、相手を援助しないことに対して悪い気持ちを抱くはずである。

Williamson & Clark (1989a) は、2つの実験(実験1, 2)で援助供与が気分や自己評価の高揚をもたらすことを確認したうえで、次の実験では(実験3), 援助供与と気分・自己評価の高揚との間に二者の關係タイプが仲介しているかどうかを検討した。つまり、共同的關係を望んでいる者には、相手を援助したいという願望があり、相手を援助した結果としての気分・自己評価の高揚が生じる。一方、交換的關係を望んでいる者の場合、援助供与が二者の間に不均衡の認知を生じることになり、そのような認知に伴う苦悩が生じる。

実験手続きと結果を Fig. 4 と Table 10 に示す。女性のサクラと交換的關係を望むように操作された男性被験者では、援助供与も援助供与を妨げられることも気分や自己評価にあまり影響をおよぼさなかった。しかしながら、共同的關係を望むように操作された被験者では、援助供与による気分と自己評価の高揚がみられるとともに、援助の妨げによる気分と自己評価の悪化が生じた。

Table 10

気分・自己評価の変化に関する条件別平均値
(Williamson & Clark, 1989a, 実験3より)

	援 助	《気分変化》		《自己評価変化》	
		援助なし	援 助	援助なし	援 助
交換的關係	-1.8 (N=13)	0.4 (N=12)	4.3	1.5	
共同的關係	8.3 (N=12)	-7.9 (N=13)	6.6	-8.4	
[分散分析]	援助の主効果 $p < .08$ 交互作用 $p < .02$ 下位検定 $a: p < .01$		援助の主効果 $p < .02$ 交互作用 $p < .10$ 下位検定 $a: p < .01$		
得点範囲	《気分変化》高揚 <120> ~ <-120> 悪化 《自己評価変化》高揚 <150> ~ <-150> 低下				

男子大学生が実験室に来る。→テーブルに座らされる。
2束のタイルがテーブルの上に置かれている（1つは被験者側、もう1つは向い側）。
ハンドバッグや女性用セーターが椅子に置かれている。→もう1人の被験者のものであり、電話のために部屋を出ていったことが告げられる。

課題： 文字タイルから単語をつくることなどの単純課題
その時の気分が重要であることが強調される。

写真撮影
属性質問紙、気分・自己評価測定（事前）→記入後にフォルダーに入れるように指示した後、
実験者は退室する。

《関係タイプの操作》
フォルダーの中にもう1人の被験者の回答済質問紙と写真が入っている。
魅力的な女性の写真
回答済質問紙 { 共同の関係 } →先行研究と同様な情報
 { 交換的關係 }

《援助操作》
実験者が戻って来て、次のように告げる。「もう1人の被験者を探し出したが、彼女は、電話中で家族問題に苦慮しているようだった。彼女は、実験を終える前に帰らなくてはならないだろう。」そして、次のように付け加える。
援助なし条件： 「彼女は、あなたが次の課題のために彼女の分の文字を分類することによって援助できないかと、私に尋ねた。しかし、文字を分類することも課題の一部であるので、それはできないと言った。」
援助条件： 「彼女は、あなたが次の課題のために彼女の分の文字を分類することによって援助できないかと、私に尋ねた。しかし、文字を分類することは課題の一部ではないので、あなたが望めばよろしいと言った。あなたが援助したければ、この表に従って、これらのお盆にタイルを置いてください。それから、自分自身の課題に取り組んでください。」

実験者は、退室する。援助条件では、全員が援助を行う。

《従属変数の測定》
気分・自己評価測定（事後） { 気分： 12項目の気分を表す形容詞 } →11点尺度
 { 自己評価： 15項目の自己評価を表す形容詞 }

Fig. 4 Williamson & Clark (1989a, 実験3) による実験の概略図

(3) 相手の欲求を覚えておくこと

共同的關係規範は、利得が相手の欲求に応じて与えられることを含んでいる。したがって、共同的關係では、相手の観点に立ち、相手の欲求の兆候に注意することが必要とされる。

① Clark *et al.* (1986, 実験1) の研究

この実験では、次の3つの仮説が検討された。仮説a：相手が同様な仕方で返報できる機会がないときには、相手の欲求を覚えておくことは、交換的關係よりも共同的關係が望まれている場合に、大きくなる。仮説b：交換的關係が望まれている場合には、相手の欲求を覚えておくことは、相手が同様な仕方で返報できないときよりもできるときに、大きくなる。仮説c：共同的關係が望まれている場合には、相手が同様な仕方で返報できる機会の存在は、相手の欲求を覚えることに影響をもたらさない。実験手続きと結果を Fig. 5 と Table 11 に示す。結果のパターンは、3つの仮説を支持している。

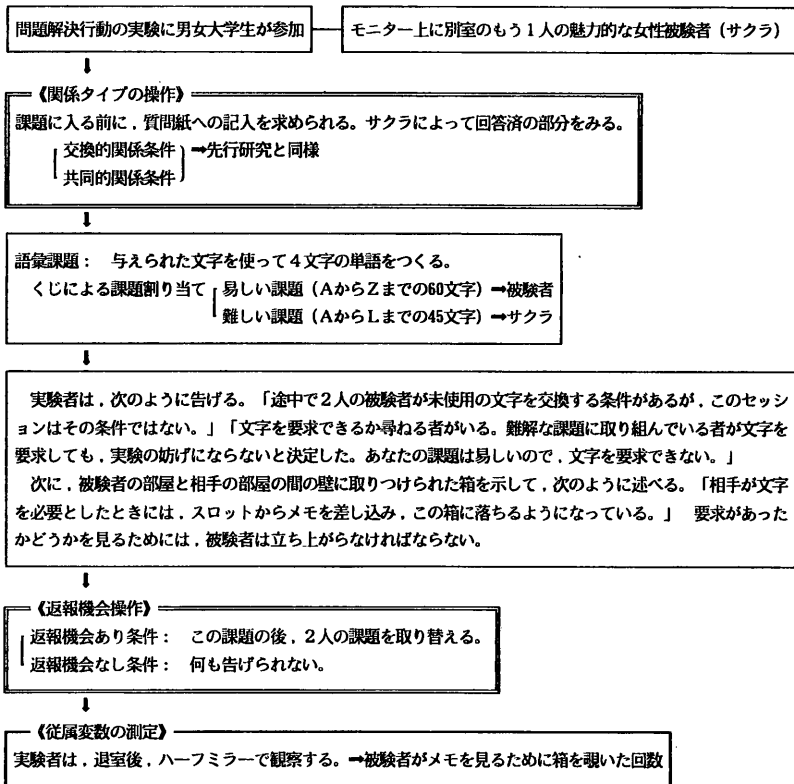


Fig. 5 Clark *et al.* (1986, 実験1) による実験の概略図

Table 11

メモを見るために箱を覗いた回数に関する条件別平均値
(Clark et al., 1986, 実験1より)

	返報機会なし	返報機会あり	[分散分析]
共同の関係	a (2.17 (N=18)	2.06 (N=16)	対数変換: $\log(X+1)$ <被験者の性×関係タイプ ×返報機会> 関係タイプ×返報機会 $p < .05$ 下位検定 a: $p < .05$
交換的關係	(1.19 (N=16) ← a → 2.13 (N=16)		

この実験結果について、次の3つの代替解釈が検討された。代替解釈1: 共同の関係では相手が被験者に依存していると知覚されるため。代替解釈2: 共同の関係では相手との類似性が知覚されるため。代替解釈3: 関係の持続に関する予想が異なるため。

代替解釈1と2は、この実験での関係タイプの主効果を説明できるが、交互作用効果を説明できない。代替解釈3では、関係のタイプにかかわらず同一の交換規範が存在していると考えられる。交換的關係-返報機会なし条件では、関係が将来にも存続するとは期待されないために、相手の欲求に注意が払われないことになり、実験結果と一致する。しかし、共同的關係においても同様な交換規範が作用しているならば、即座に返報する機会がないのに相手を援助することは、不衡平をもたらすことになる。つまり、共同的關係においても返報の有無の効果が生じるはずであるが、実験結果はそのような効果を示していない。したがって、3つの代替解釈は、棄却される。

② Clark et al. (1986, 実験2) の研究

この実験は、被験者が相手を援助することを禁止した場合にも、共同的關係を望むように操作された被験者が、相手の欲求に注意を向けるかどうかを確かめるために行われた。実験手続きの大筋は、先の実験1と同じであるが、次の部分が異なる。難しい課題に取り組む被験者が易しい課題に取り組む被験者から文字を要求できる条件がある、と告げられた。その条件では、箱に赤色と緑色のライトが取り付けられ、赤色のライトを点灯させるボタンを押すことによって文字の要求に関するメモを送った合図をすることになっていた。しかし、「今回のセッションは、そのような条件ではないが、実験条件を統制するためにそのようにする」と告げられた。なお、返報機会の有無の操作は行われなかった。10分間に被験者がライトを見るために振り向いた回数に関する分散分析を

行ったところ (対数変換 $\log(X+1)$, 関係タイプ×被験者の性), 関係タイプの主効果のみが有意であった ($p < .05$)。共同的关系条件が2.31回, 交換的关系条件が1.29回であった。共同的关系においては, 援助できなくても相手の欲求に注意を向ける傾向があった。したがって, 関係のタイプにかかわらず同一の規範が存在しているという説明や将来の相互作用の期待における差異による説明が棄却される。

③ Clark *et al.* (1989) の研究

先述したように, 友人同士と未知者同士のペアを用いた, この研究では, 現実の共同的关系 (友人) においても相手の欲求に注意を向ける傾向があることが認められた。

(4) 相手の情動表出に肯定的に反応すること

交換的关系よりも共同的关系が望まれているときに, 相手の欲求に対する注意が高まるならば, 共同的关系にある相手による情動表出 (欲求についての情報伝達) は, 肯定的に受け取られるだろう。

① Clark *et al.* (1987, 実験2) の研究

共同的关系志向性をもつ者にとって, 悲しみの情動を表出する他者と直面することは, 援助を高めると思われる。第1に, 悲しみの表出は, その人が他者依存的であることを意味し援助の必要性が高いと知覚される。共同的关系志向性をもつ者は, 相手の欲求に応じることを望んでいるので, そのような人を援助しようと動機づけられる。第2に, そのような情動表出は, 共同的关系志向性をもつ者に共感を引き起こし, それが援助をもたらす。相手との関係タイプを操作したこの実験では, 次の仮説が検討された。仮説 a : 相手と交換的关系よりも共同的关系を望むように操作された被験者は, その相手をより援助する。仮説 b : 相手の悲しみの表出は, 共同的关系を望むように操作されている場合には援助を促進するが, 交換的关系を望むように操作されている場合にはそうでない。これらの仮説を検討するための実験が Fig. 6 に示す手続きで行われた。結果は, Table 12 に示すように, 2つの仮説が明確に支持された。しかし, 次のような代替解釈が可能であろう。関係タイプにかかわらず, 同一の規範が作用しており, 関係操作に伴う将来の相互作用期待の差異によって結果を説明できるかもしれない。つまり, 共同的关系操作によって将来も相手から特定の利得を引き出すことができるという期待が生じたが, 交換的关系条件ではそうではなかった。さらに, 情動的に動揺している人物から返報を引き出すことが

創造性の実験に男女大学生が参加

実験室には、2つのテーブルがある。一方には、異性の持ち物が置いてある。

創造性が気分どのように影響されるかに関する実験である。

被験者の写真を撮る。

もう1人の被験者は、すでに他の課題を終えており、「風船彫刻」課題に取り組むために戻って来るはずである。

—《関係タイプと情動表出の操作》—

気分質問紙と創造性に関わる属性についての質問紙に回答を求められる。→実験者退室
相手の写真(魅力的な異性)と回答済の質問紙を見てしまう。

《関係タイプの操作》

質問紙への回答で、先行研究と同様な情報を与える。

《情動表出の操作》

悲しみ条件： 悲しそうな表情の写真

現在の気分(悲しい-3~+3幸せ) → “-3” に○印をつけている。

コメント「家から悪い知らせがあったので、落ち込んだ気分である。」

中性的気分条件： 中性的表情

現在の気分 → “1” に○印をつけている。

コメント「私は、よい気分である」

実験者が、2つの盆を持って戻って来る。一方には“ペインティング”、他方には“彫刻”とラベルがつけられている。→被験者のテーブルには前者、相手のテーブルには後者の盆が置かれる。

被験者は、30分間絵を描くように言われる。別の実験のために退室すると言いながら、彫刻の材料を見て、「風船が膨らませておけばならぬのに」とつぶやく。→被験者に次のように告げる。「よければ、風船を膨らませておいてもらえないだろうか。そうしたくなければ、あなたの課題を開始してください。課題を始めたら、相手を助けるのはやめてください。」

—《従属変数の測定》—

実験者は、退室後、ハーフミラーで観察する。→被験者が風船を膨らませるのに費やした時間

Fig. 6 Clark *et al.* (1987, 実験2) による実験の概略図

容易であると思われたのかもしれない。しかし、この代替解釈は、次の2つの理由で棄却される。第1に、未返報の負債の存在が苦悩を生起させるので、共同の関係性を望む相手にわざわざそのような苦悩を生起させる理由はない。第2に、他の研究で相手の欲求に応じることが不可能である場合でも相手の欲求に注意を向けるという先に述べた研究知見を、この代替解釈は説明できない。

Table 12

被験者が風船を膨らませるのに費やした時間<秒>
(Clark *et al.*, 1987, 実験 2 より)

	〔表出された情動〕		〔分散分析〕
	悲しみ	中性	
共同的関係	204.2	← a → 95.8	対数変換: $\log(X+1)$ <関係タイプ×表出された情動×被験者の性> 関係タイプの主効果 $p < .0001$ 関係タイプ×表出された情動の交互作用 $p < .02$ 表出された情動の主効果 $p < .06$ 被験者の性の主効果 $p < .08$ 三重交互作用 $p < .10$ 下位検定 a: $p < .01$
交換的關係	10.4	16.7	

各セル: $N=12$

② Clark & Taraban (1991, 実験 1) の研究

共同的関係においては、情動の表出が相手も自分と同じように感じているという相手からの価値あるコミュニケーションであると考えられる。したがって、情動表出の種類にかかわらず、交換的關係よりも共同的関係が望まれているときには、より肯定的に反応されることになる。この仮説を検討するために男女大学生を被験者とする実験が行われた。

被験者が実験室に来ると、TVモニター上にもう1人の被験者(中程度に魅力的な男性か女性)が映っていた。印象形成に関する実験であり、先に来たほうが刺激人物になると告げられ、次の手順で実験が行われると説明された。1) 相手が回答した質問紙を見て、相手の第1印象を形成する、2) 相手といっしょになって単語課題に取り組む、3) 別々になって相手の印象を答える。この説明の後、被験者は、相手が回答済の質問紙を受け取った。その中には、先行研究と同様に関係タイプの操作に関する情報が含まれていた。また、次のようにして情動表出の操作が行われた。相手は、その時の気分(幸せ、悲しみ、いらだち)を両極尺度上で答えているが(まったく感じていない<1>~<7>ひじょうに感じる)、情動表出に関する4つの条件が設定された。a) 幸せ条件、b) 悲しみ条件、c) いらだち条件、d) 情動表出なし条件。a)、b)、c)の条件では、該当する気分では“7”に、他の気分については“1”にそれぞれ○印をつけていた。d)の条件では、すべての気分では“1”に○印をつけていた。その後、被験者は、9個の特性で被験者を評定した(好ましき次元6項目、依存性次元3項目)。結果をTable 13に示す。

Table 13

サクラに対する印象評定に関する条件別平均値
(Clark & Taraban, 1991, 実験1より)

	《好ましさ》		《依存性》	
	共同的関係	交換的關係	共同的関係	交換的關係
幸せ条件	36.6f	33.7e	8.5ab	13.0e
悲しみ条件	29.7cd	24.7ag	12.7ch	14.2f
いらだち条件	25.9bg	22.1a	9.2a	13.0d
情動なし条件	28.4bc	28.5bc	10.1ag	11.6bdegh

[分散分析] (対数変換, $\log(X+1)$) - 被験者や相手の性の効果なし

<関係タイプ×表出された情動>

関係タイプの主効果 $p < .001$ 関係タイプの主効果 $p < .0001$
 表出された情動の主効果 $p < .001$ 表出された情動の主効果 $p < .01$
 交互作用 $p < .10$ 交互作用 $p < .07$
 下位検定 Newman-Keuls 検定 ($p < .05$) - 異なる英数字

$N=183$, 各セルへの配分数不明

好ましさと同様に、交換的關係よりも共同的關係を望むように操作された被験者は、相手の情動表出を肯定的に評価する傾向にあった（好意的であり、依存的でない）。また、両測度ともに、有意な情動表出の主効果と交互作用の傾向性が得られた。これらの効果の方向は、測度により異なっていた。

まず、好ましさについてみると、何も情動が表出されないときには、関係タイプの効果が生じない。しかし、何らかの情動が表出されたときには、交換的關係よりも共同的關係を望むように操作された被験者が肯定的に評価する。また、情動を表出しない条件との比較から、情動の種類による差異が認められた。幸せの表出は、関係タイプにかかわらず、好ましさ評価を高める。しかし、悲しみやいらだちの表出は、交換的關係条件では評価を低めるが、共同的關係条件では何の効果ももたらさない。

次に、依存性についてみると、何の情動も表出されないときや悲しみを表出したときには、関係タイプの差異が生じない（Table 13からは、悲しみ条件では関係条件差がみられるが、報告の本文に従った）。しかし、幸せやいらだちの表出は、共同的關係条件よりも交換的關係条件での依存性評価を高める。また、情動を表出しない条件との比較をすると、悲しみの表出は、関係タイプにかかわらず依存性評価を高める。

以上の結果から、次のように結論された。好ましさに関する結果は、次のこ

とを意味する。a) 情動表出が共同の関係規範に一致する, b) 情動表出は, 相手が共同の関係を望んでいることの表示としてみられる, c) 情動を表出する人々は, 人間的で傷つき易いようにみられ, 自分自身の情動や欲求を理解・共感してくれると思われる。一方, 依存性に関する結果は, 不適切な文脈での情動表出がその人物が情動的で依存的であるという知覚をもたらすことを, 示唆している。

(5) 相手に対する積極的な情動表出

共同の関係規範は, 相手の欲求に対して自分が敏感であるべきであるばかりでなく, 自分自身の欲求に対して相手が敏感であることを規定している。これを促進するために, 相手に対して自分自身の欲求に関する情報を積極的に伝達し, 返報を試みることなしに相手からの援助を受容する。

Clark & Taraban (1991, 実験2) による研究では, 交換的關係よりも共同的關係において自分の情動を積極的に表出されるかどうかを検討された。その際, 進行中の自然に生起している共同の關係にある者, すなわち友人同士が対象とされた。

男女大学生が同性の友人と2人で実験室にきた。2組のペアが同時に来るように計画されており, 自分の友人か他のペアの1人(未知者)と組み合わせられ, 10分間の私的会話に従事すると説明された。被験者は, それぞれ話題のリストを渡され, 自分の好みによって話題を順序づけるように求められる。渡されたリストには, 情動的な話題(平静に感じるとき, 恐れ, 悲しくさせるもの, 怒らせるもの, 幸せにさせるもの)と非情動的な話題(将来の計画, 好みのレストラン, Pittsburghの気候に関する意見, 園芸についての意見, Pittsburghの政治に関する意見, Carnegie Mellonに関する意見, 野生生物に関する見解, 好みの映画, 今までに最もよかったパーティー, 合衆国における産業)があった。その後, 被験者をそれぞれ別室に連れて行き, 関係操作のチェックのために, 他の3人それぞれとの関係の親密さを評定させた(まったく親しくない〈0〉～〈7〉ひじょうに親しい)。

親密さ評定に基づき, 関係操作の有効性を確認したうえで(友人条件5.48; 未知者条件1.06; $p < .0001$), 組み合わせられた相手と情動的话题を論議しようとする意志の強さが関係タイプによってどのくらい異なるか比較された。5つの情動的话题の順位を合計したところ(得点が低いほど意志が高いことになる), 未知者同士(41.00)よりも友人同士(31.57)のほうで情動的话题が好まれる

傾向にあった ($p < .004$)。また、Table 14 に示すように、話題別にみても、全体的傾向に同様なパターンが現れた。情動的話題と非情動的話題の比較では、次の興味深い差異があった。友人同士では、幸せや怒りに関する話題が他の非情動的話題よりも好まれた ($p < .002$)。未知者同士では、幸せに関する話題は同じ差異を示したが ($p < .004$)、平穏さに関する話題は他の非情動的話題よりも回避された ($p < .008$)。つまり、幸せに関する話題は、関係タイプにかかわらず、好まれる。友人同士での怒りに関する話題は、相手が同情を示し、問題解決の方法を示唆してくれるかもしれないので、好まれるかもしれない。また、未知者同士での平穏さに関する話題は、論議するのに非日常的で困難な情動であるために、論議をためらうのであろう。

Table 14

情動的話題の順位に関する条件別平均値
(Clark & Taraban, 1991, 実験 2 より)

	友人同士 N=15	未知者同士 N=16	t 検定	サイン検定
平静に感じるとき	8.5	10.7	$p < .08$	すべて $p < .03$
恐れ	7.1	9.4	$p < .05$	
悲しくさせるもの	7.6	9.2		
怒らせるもの	4.7	6.9	$p < .01$	
幸せにさせるもの	3.8	4.1		

ところで、先述したように、Clark & Mills (1979, 実験 2) は、人々が交換的關係よりも共同的關係において援助を好意的に受容する傾向にもあるという証拠を得た。つまり、交換的關係とは逆に、共同的關係が望まれているときには、返報できない援助を受けることが好意を高めた。これは、共同的關係での情動の積極的表明と対応する知見といえる。返報できない援助の受容は、自分の欲求を相手に伝えることと対応しているからである。

3. 関係タイプ操作の適切さ

これまでにレビューした研究での 2 つの関係タイプの操作は、典型的には次のように行われる。被験者は、身体的に魅力のあるサクラと研究に参加していると思込まされる。その際、被験者がそのサクラについて受け取る情報が操作される。共同的關係条件では、サクラは、独身であり（ほとんどすべての被

験者と同様に)、大学新生であり、新しい人々とつきあいたがっている。交換の関係条件では、サクラは、既婚であり、すでに数年大学におり、新しい人々に出会うことに関心をもっていない。この操作では、次のことが仮定されている。大学生被験者、すなわち、研究に典型的に参加している1年生や2年生は、一般的に、新たな共同的关系を獲得することが可能であり、それを切望する。一方、魅力的な目標人物に自分が類似しておらず共同的关系を獲得できないことを示すと、交換的关系が望まれるはずである。しかし、このような操作が共同的关系規範あるいは交換的关系規範に従いたいという願望をもたらすかどうかという疑問が生じる。したがって、このような操作の有効性を確認することが必要である。

① Clark & Waddell (1985) の研究

先述した搾取認知を取り扱った研究において、Clark & Waddell (1985) は、関係タイプ操作の有効性を確認するために、関係タイプ操作後に、Table 15 に示す尺度を被験者に回答させた。主成分分析を行ったところ、第Ⅰ因子には共同性因子 (1) から (5) までの共同的关系項目が高い負荷、第Ⅱ因子には交換性因子 (すべての交換的关系項目が高い負荷) がそれぞれ現れたので、共同的关系 5 項目の合計得点から交換的关系 6 項目の合計得点を減じた指標を求めた。交換的关系条件よりも (-9.2)、共同的关系条件の被験者のほうが (-2.2)、相手との共同的关系を望む傾向が認められた ($p < .05$)。

Table 15

相手と望む関係タイプに関する質問項目 (Clark & Waddell, 1985より)

《共同的关系項目》

- (1) 被験者と相手は、将来、友だちになれそうか。
- (2) 被験者は、相手の欲求を充たしそうであるか。
- (3) 相手は、被験者の欲求を充たしそうであるか。
- (4) 被験者は、相手を喜ばすことを与えそうであるか。
- (5) 相手は、被験者を喜ばすことを与えそうであるか。
- (6) 被験者は、相手と同じ気分になれるかどうか。
- (7) 相手は、被験者と同じ気分になれるかどうか。

《交換的关系項目》

- (1)・(2) 被験者と相手は、受けた援助とくに返報する義務を感じるか。
- (3)・(4) 被験者と相手は、援助を受けた後、できるだけ相応した援助を返報するか。
- (5)・(6) 被験者と相手は、援助を受けた後、できるだけすばやく援助を返報するか。

7点尺度：否定的〈1〉～〈7〉肯定的

② Clark (1987) の研究

この実験には、男女大学生が印象形成研究の名目で参加した。被験者は、まず写真を撮られ、属性に関する質問紙に回答した。その後、相手（異性）の写真と相手によって回答された質問紙を見せられた。写真には、予備調査によって選別された魅力的な異性かあるいは魅力的でない異性が写っていた。回答済の質問紙によって、先に述べたように関係タイプ（共同的関係、交換的關係）に関する情報が操作された。そして、被験者は、共同的関係に対する願望に関する7項目と交換的關係に対する願望に関する7項目から成る尺度に回答し（Table 16参照）、相手ともちたい関係の選択（友人、恋愛関係、知り合い、ビジネスライクな関係、つきあいたくない）を行った。

Table 16

相手と望む関係タイプに関する質問項目（Clark, 1987より）

〈共同的関係項目〉

- (1) 被験者は、相手の欲求に喜んで応じるか。
- (2) 被験者は、相手を喜ばすことをするのが好きか。
- (3) 被験者は、相手を喜ばすことをしたいか。
- (4) 相手に被験者自身の欲求に応じてもらいたいか。
- (5) 相手は、被験者の困り事をはっきりとは伝えたくない類の人物か。
- (6) 被験者は、他のだれよりもとくに相手の欲求に敏感になるということがないか。
- (7) 相手の欲求に注意を向けるようにしないほうが被験者にとってよいか。

〈交換的關係項目〉

- (1) もしも相手から何か価値あるものを受け取ったら、被験者は、すぐに相応するものを返報するか。
- (2) もしも相手が被験者を援助したら、被験者は、相手にすぐに返報しなければならないと思うか。
- (3) 相手との関係では、できるだけ物事を均等にしておくことが最良であるか。
- (4) もしも相手に価値ある何かを与えたら、被験者は、相手がすぐ後に返報してくれることを期待するか。
- (5) 被験者は、相手に与えた利得をわざわざ覚えておくことをしないか。
- (6) もしも、相手が被験者に何か好意をしてくれ、その後返報を求めたら、被験者は腹を立てるか。
- (7) もしも被験者がしたことに対して相手が返報をしたら、被験者は断わるか。

7点尺度：否定的〈1〉～〈7〉肯定的

(5)～(7)：いずれも逆転項目

共同的関係得点から交換的關係得点を減じた得点と相手と共同的関係（友人、恋愛関係）を望んだ被験者の割合を、それぞれ Table 17 に示す。共同的関係をどの程度望むかを見ると、関係タイプの操作は有効であるといえる。直接的に望む関係を選択させた場合にも、有意ではなかったが、操作の有効性を示唆している。

Table 17

差異得点（共同得点－交換得点）に関する条件別平均値と
共同的関係を望んだ者の割合（Clark, 1987 より）

	《差異得点》		《共同的関係を望んだ者の割合(%)》	
	共同的関係	交換的關係	共同的関係	交換的關係
低－魅力度	-1.6	-7.8	50.0	27.3
高－魅力度	1.8	-2.4	63.6	40.0
[分散分析]	関係操作の主効果 $p < .05$ 魅力の主効果 $p < .09$		[ロジスティック重回帰分析] 有意な効果なし	

各セル： $N=12$ （交換－高魅力条件のみ $N=11$ ）
差異得点の範囲：共同的 $\langle +42 \rangle \sim \langle -42 \rangle$ 交換的

III. 関係志向性における個人差

ここまでは、操作された関係タイプに応じて、あたかもすべての人々が同程度に共同的関係規範あるいは交換的關係規範に従って行動しているかのように論じた。しかし、被験者にとっての外的条件としてではなく、被験者の個人的な傾性として2つのタイプの関係志向性を考えることができる。

1. 共同的関係志向性

共同的関係志向性が高いことは、共同的関係規範を支持しそれに従って行動することを意味する。この志向性の程度を測定するために、Clark *et al.* (1987, 実験1) は、共同的関係志向性尺度を開発した。これを Table 18 に示す。それは、他者に自分自身の欲求に応じてもらいたいという願望を測定する項目と同様に、他者の欲求に応じたいという願望を測定する項目を含んでいる。共同的関係志向性尺度は、適切な心理測定上の属性をもつ。561名の大学生のサンプルに基づき尺度の検討が行われた。当該項目と他の項目の総和得点との相関をみると、項目の等質性を十分に示していた (.23-.50)。主成分分析においても、14項目すべてが第I因子で正の負荷量を示した (.29-.64)。さらに、その尺度に関する Cronbach の α は .78 であった。128名の学生の11週間隔での再検査信頼性は、 $r = .68$ であった。また、尺度得点は、Crowne-Marlowe の社会的望ましさ尺度との間に有意な相関がなかったが、Berkowitz-Lutterman

の社会的責任性尺度や Mehrabian-Epstein の共感性尺度などの概念的に重複する測度との間には有意な相関を示した。

Table 18

共同の関係志向性尺度の試訳 (Clark *et al.*, 1987より)

-
1. 他の人々が私の欲求を無視すると、私は心配になる。
 2. 私は、決定をするときには、他の人々の欲求や気持ちを考慮に入れる。
 3. *私は、他の人々の気持ちにとりたてて敏感であるというわけではない。
 4. *私は、自分自身がとくに援助的な人物だとは思わない。
 5. 私は、手間がかかっても人々が援助的であるべきだと、信じている。
 6. *私は、他の人々に援助を与えることをとくに好きだというわけではない。
 7. 私は、知り合いが私の欲求や気持ちに敏感であることを望んでいる。
 8. 私は、しばしば、手間がかかっても他の人を援助する。
 9. *私は、他の人々の個人的欲求に注意を払わないようにすることが最善であると、信じている。
 10. *私は、他の人々をしばしば援助するような類の人物ではない。
 11. 私は、必要なことがあるときには、知り合いに援助してくれるように頼む。
 12. *気持ちが悪くしている人々がいるときには、私は、その人々を避けるようにする。
 13. *自分の困り事は、自分で処理すべきである。
 14. 私は、自分の欲求を他の人々に無視されると、傷つく。
-

〔被験者は、“まったくあてはまらない”〈1〉から“完全にあてはまる”〈5〉までの5点尺度で、各項目を評定する。〕

a: 逆転項目

この尺度を用いて、Clark *et al.* (1987, 実験1) は、個人的傾性としての共同の関係志向性と援助行動との関係を検討した。実験の手続きとその結果を、それぞれ Fig. 7 と Table 19 に示す。共同の関係志向性が援助を促進する傾向が得られたものの、関係志向性×表出された情動の交互作用は有意でなかった。しかし、平均値の方向は、共同の関係志向性をもつ者にとって、相手による悲しみの表出が援助を高めることを示唆した。

別の研究では(Williamson & Schulz, cited in Williamson & Clark (1989b)), アルツハイマー病の家族成員の介護者として働いている人々の苦悩が査定された。共同の関係志向性が低い介護者に比べ、共同の関係志向性が高い介護者は、アルツハイマー病患者の介護の重荷によって苦悩に陥ることはなかった。とりわけ、時点1での高い共同の志向性得点は、時点1と6ヵ月後の時点2でのうっとうしとあまり結びついていなかった。

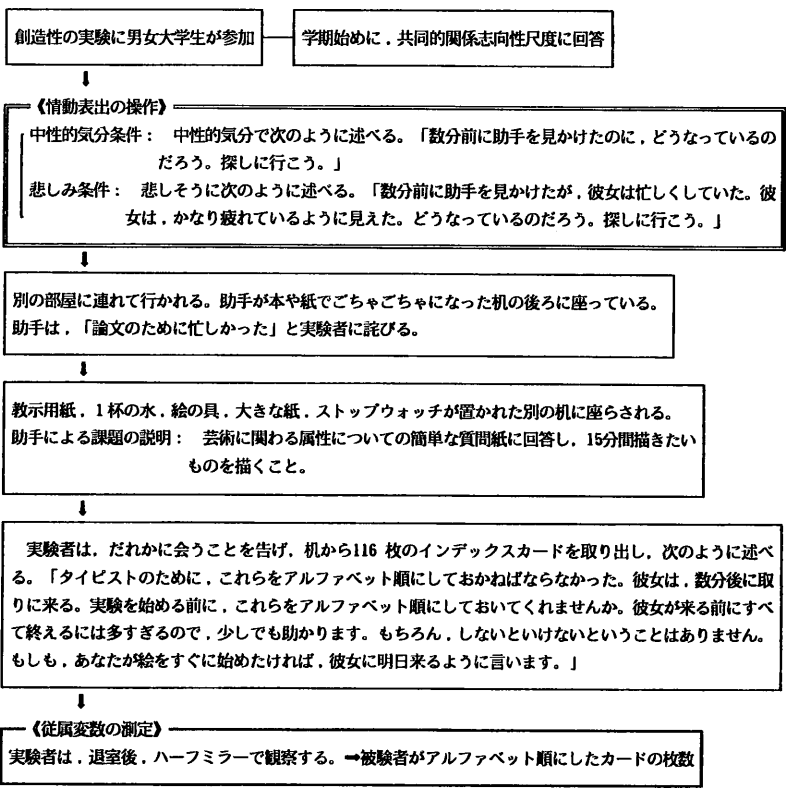


Fig. 7 Clark et al. (1987, 実験1) による実験の概略図

Table 19

被験者がアルファベット順にしたカード枚数に関する条件別平均値
(Clark et al., 1987, 実験1より)

	《表出された情動》		[分散分析]
	悲しみ	中性	
高一共同的志向性群	61.30 (N=10)	25.78 (N=9)	対数変換: $\log(X+1)$
低一共同的志向性群	3.10 (N=10)	17.30 (N=10)	\langle 関係志向性 \times 表出された情動 \times 被験者の性 \rangle 関係志向性の主効果 $p < .05$

2. 交換的關係志向性

交換的關係志向性が高いことは、交換的關係規範を支持しそれに従って行動することを意味する。この志向性における個人差を測定するために、未公開の研究ではあるが、Clark *et al.* (cited in Williamson & Clark (1989b)) は、9項目から成る交換的關係志向性尺度を開発した。この尺度は、与えられた利得に対する返報の期待（たとえば、“私は、他の人に何かを与えると、一般的にお返しのを期待する”）、受け取った特定の利得に対して他者に返報したいという願望（たとえば、“だれかが私に贈り物をくれると、私は、できるだけ相応した贈り物をその人に買ってあげようとする”）、そして、できるだけ与えられた利得と受け取った利得を覚えておきたいという願望（たとえば、“私は、自分が他者に与えた利得をわざわざ覚えておこうとしない”（逆転項目））を測定するための項目を含んでいる。その妥当性を支持する十分な証拠がある。366名の学生サンプルに基づく、Cronbachの α 係数は、.73であった。7週間隔での110名の大学生の再検査信頼性は、 $r=.71$ であった。同じサンプルを用いた主成分分析では、すべての項目が第I因子で正の負荷量を示した（.32-.66）。また、この尺度は、Fenigstein *et al.*の社会的不安尺度やCrowne-Marloweの社会的望ましき尺度とは無関連であったが、Murstein-Azarの交換志向性尺度とは正の相関を示した。

この尺度での得点は、いくつかの交換的行動をうまく予測もした。この尺度によって交換的關係志向性が高いとされた者は、次のような特徴的傾向をみせた（Clark *et al.*, cited in Williamson & Clark (1989b)）。a) 共同の報酬がある課題での個々のインプットをより覚えようと努力する、b) インプットに従って報酬を分割することに対する大きな選好を示す、c) 返報できない援助を受け取ることによって、気分を悪化させ、援助者に対する魅力を低める。

3. 共同的關係志向性と交換的關係志向性との関係

共同的關係志向性尺度と交換的關係志向性尺度は無相関を示し、せいぜい小さな負の相関しか得られない（cited in Williamson & Clark (1989b)）。つまり、2つの尺度が経験的に独立であり、たとえば高い共同的得点が低い交換的得点を必ずしも意味しない。

これは、興味深い傾向である。共同的關係と交換的關係に対する願望を操作

している研究では、共同の関係規範に従う願望は、交換的關係規範に従う願望の欠如と明確に結びついており、交換的關係規範に従う願望は、共同的關係規範に従う願望の欠如としばしば明確に結びついているからである。つまり、個人差においても、同じパターンすなわち2つの関係志向性における負の関係が期待される。

しかしながら、経験的に2者が独立的であるということは、次のことを意味する。2つの関係志向性が同時に高いこともあり得る。これらの人々は、他者を援助するが、迅速な返報を期待しないかもしれない。あるいは、彼らは、共同的關係ではきわめて共同的であり、交換的關係においてはきわめて交換的であるかもしれない。また、2つの関係志向性が同時に低いこともあり得る。これらの人々は、どのような種類の正当性についても配慮せず、主に自己利益的である。このように考えれば、2つの関係志向性が独立であるという事実は、特定の他者との共同の（交換的）関係に対する願望が同じ他者との交換的（共同の）関係に対する願望と負の関係にあることを示す初期の知見と論理的に矛盾しないだろう。

IV. 2つの関係タイプ論における意義と問題点

1. 家族の正当性に関する意義

Williamson & Clark (1989b) に従って、2つの関係タイプ論が家族内での正当性にどのような意義をもつかを論じる。

家族内における交換的行動は、不満感や不正感を生じる。たとえば、自動車を買うための金を成人した子どもに与えた親は、その金がビジネスライクな仕方では返されたら、傷ついた気持ちになるだろう。同様に、各人がどのくらい金を使うことができるかを定めるために各人の稼ぎを注意深く覚えている夫や妻は、苦悩に陥るだろう。そのような場合、当事者は、自分の苦悩を解消するのに困難を感じる。つまり、一般的には、共同的關係と交換的關係の区別は、明確に抱かれているわけではないが、返報やインプットの記憶は少なくとも交換的關係においては“公正な”行動である。それでも、人々は、暗黙には、何か間違っていると思うであろう。つまり、間違っていることは、苦悩している人が共同的關係を好んでいるにもかかわらず、相手が交換的關係を好んでいるということである。

ここで、結婚契約や、特定の家事遂行に対して特定の報酬を子どもに与えることなどの家庭内における交換的行動について述べる。夫婦間でのお互いの役割や遂行義務などをあらかじめ詳細に決めておく結婚契約は、結婚を交換的關係化する。また、特定の家事遂行に対して特定の報酬を子どもに与えることは、短期間は効果的である。しかし、そのような報酬を与えられた子どもは、自分の子どもの幸福に対する親の義務と同じように子ども自身も他の家族成員の欲求に応じる義務があることを学習しないかもしれない。これも、長期的には、共同的關係規範の使用を低めることになる。

次に、苦悩している家族の臨床的治療のための意義を考察する。お互いに満足している夫婦は、共同的關係規範を遵守していると考えられる。これらの関係は、一方が他方の欲求を無視することによって共同的關係規範に違反し始めたならば、悪化する。そして、夫婦は、苦悩を感じ、交換的關係に移行するだろう。しかしながら、交換的關係規範は、大半の人々が夫婦において理想的と考えるものと一致しておらず、共同的關係規範と同じ安心感（すなわち、他方が一方の欲求に責任を感じることを知っていることから生じる安心感）を提供できない。その結果、夫婦は、不満足を感じ続けるだろう。これらは、いわゆる夫婦セラピーに対して有益な示唆をもたらす。つまり、相手が特定の欲求の1つを充たしたときに、相手に特定の報酬を与えるように夫婦を訓練することは（つまり、交換的關係規範への方向づけ）、短期的にはうまく行くかもしれないが、長期的改善をもたらさないとと思われる。

ところで、2つの関係タイプの間での区別と同様に、関係志向性の個人差も家族内の正当性にとって重要な意義をもつ。

家族の個々の成員の関係志向性は、家族関係をそれに応じた方向に向ける。たとえば、家族成員が共同的關係志向性において高いほど、家族関係での共同的關係規範への遵守が強まるはずである。

また、2人の家族成員の間で生起する関係志向性における一致・不一致も重要であろう。たとえば、もしも、夫婦が共同の志向性と交換的志向性において一致しているならば、彼らがうまくやっていると予測されるだろう。共同的關係志向性において高く、同時に交換的關係志向性において低い夫婦が最も高い調和を示す。逆に双方の交換的關係志向性が高い（そして共同の志向性において低い）夫婦も機能的にうまく行くかもしれない。関係志向性における不一致は、双方の不満足感をもたらすだろう。たとえば、一方の共同的關係志向性が高く他方の共同的關係志向性が低い夫婦では、双方が不幸になる。共同的關係

係志向性が高い者は、自分自身の欲求が十分に充たされていないと感じ、他方の欲求に対する自分自身の注意が十分には評価されていないと思う。対照的に、共同的關係志向性が低い者は、他方によって息苦しくされると感じるだろう。そのような関係は、うまく行かない。最悪の組み合わせは、一方が共同的關係志向性において高く、同時に交換的關係志向性において低いが、他方が交換的關係志向性において高く、同時に共同的關係志向性において低いときである。

2. 研究枠組としての一般的意義と問題点

共同的關係と交換的關係の区別とそれぞれの関係内での心理学的機制の差異を実証的に明らかにしようとする Clark らの一連の試みを一般的な研究枠組として評価しよう。

まず、2つの関係タイプの区別に類比できる有力な社会心理学的モデルとして、Deutsch (1975) と Lerner (1975) によってそれぞれ提起されたモデルを挙げるができる。Deutsch (1975) によれば、正当性の自然な価値は、個人の安寧を促進するための効果的な社会的協同を助長する価値である。この前提に基づき、Table 20 に示すように、集団によって抱かれている目標によって、遵守される分配規範が異なると考えられた。たとえば、斎藤・佐々木 (1987) は、彼のモデルに実験的検討を加えた。また、Lerner (1975) は、自らの正当世界仮説を発展させる中で (諸井, 1983 参照)、Table 21 に示すモデルを提起した。彼によれば、どのような原理が正当とされるかは、a) 他者をどのように知覚するかと、b) 他者との知覚された関係によって異なる。a) については、他者を1つの人格としてみるか、あるいは、その他者が占めている役割や位置に注目するかである。b) については、次の3つに分類される。自己と他者との間に体験の融合があり、最低の区別しかない同一性関係、自己と他者が重要な点で類似していたり、共属していると見做されるユニット関係、他者が類似していないと知覚されたり、劣っていると見做される非ユニット関係。

Table 20

関係の主要目標と分配規範 (Deutsch, 1975より)

関係の主要目標	分配規範
経済的生産性	衡平性規範
心地よい社会的関係の促進と維持	平等性規範
個人的発達と個人的幸福感の促進	必要性規範

Table 21

正当性の形態 (Lerner, 1975より)

《知覚対象》	《知覚された関係》		
	同一性	ユニット	非ユニット
人物	自己としての相手の知覚 →必要性規範	類似性や相手との共属の知覚 →平等性規範	競合する利益や要求に関する個人的差異の知覚 →法律, デーウィンの正当性
立場	相手の欲求環境における自己の知覚 →資格, 社会的義務	相手との等価性の知覚 →衡平性規範	“規則”内で同等に合法的に要求できる乏しい資源 →正当化された自己利益

Clark の2つの関係タイプをこれらのモデルに適用してみよう。Deutsch (1975) のモデルでは、交換的關係は経済的生産性が主要目標となる場合に、共同的關係は個人的発達と個人的幸福感の促進が主要目標である場合に、それぞれ対応していると考えられる。しかしながら、心地よい社会的關係の促進と維持も共同的關係の重要な目標の1つである。したがって、共同的關係における平等性規範の役割について、曖昧となる。次に、Lerner (1975) のモデルに対応させる。共同的關係は、相手の人格を認め、自己と相手が同一化している状態に対応する。また、交換的關係は、相手自体よりも相手が占めている立場に注意が向けられ、自己と相手との等価性が知覚されている場合である。要するに、Clark の2つの関係タイプ論は、これらのモデルと比較すると、限定的であると言わざるを得ない。

Clark らの一連の研究においては、初対面の魅力的な独身女性を用いることによって操作的に共同的關係がもたらされている。また、現実に行進中の友人關係も共同的關係の典型とされている。しかしながら、魅力的な対象との間に共同的關係志向があたかも突然生起することが一般的だろうか。つまり、2つの関係タイプの生起・維持の機制に関する時間的観点が欠如しているのである。たとえば、Levinger (1974) は、二者の關係進展に関する基本的図式を提起している。a) 無接触：二者が無關係である、b) 覚知：相手に対する一方向的な態度・印象はあるが、相互作用は存在しない、c) 表面的接触：相手に対する態度が双方にあり、若干の相互作用が存在する、d) 相互性：若干の相互的な自己開示の段階から十分な自己開示の段階までである。この観点からは、初対面の魅力的な独身女性との關係はせいぜいb)かc)の水準であり、友人同士であればd)の水準に含まれるだろう。したがって、2つの関係タイプは、關係の発展モ

デルの中に位置づけることによって、精緻化されたモデルにされるべきであろう。

ところで、個人的傾性としての共同的关系志向性と交換的关系志向性が独立的事象であることが見出されている。これは、関係の進展という視点の欠如の問題と関連する重要な問題である。つまり、2つの関係志向性が関係の段階によって交互に優勢になることがあるからである。たとえば、関係の初期段階では、交換的关系志向性と共同的关系志向性が交互に優勢となるかもしれない。関係の深まりとともに、共同的关系志向性が高まり、交換的关系志向性が低下するだろう。さらに、関係が安定した段階では、交換的关系志向性も状況に応じて優勢になるかもしれない。さらに、過度な交換的关系志向性は、関係の崩壊をもたらすかもしれない。また、二者それぞれの志向性の変化の対応も重要であろう。

V. おわりに

Clark らの一連の研究は、統計的には甘い点があるが（有意な交互作用がなくても下位検定を行うなど）、次の点では、卓越した研究といえる。つまり、いわゆる“paper & pencil 研究”に陥りがちな研究領域であるにもかかわらず、終始、実験的方法によって親密な関係の基底にある心理学的機制を因果的に明確にしようとする方向性は、親密な関係に関する諸研究の中でも、評価すべきであろう。

今後は、2つの関係タイプ論の実験的再検討とともに、先述したように他の関連モデルとの対応づけ作業の中での精緻化が必要とされる。

VI. 引用文献

- Cate, R. M., Lloyd, S. A., Henton, J. M., & Larson, J. H. 1982 Fairness and reward level as predictors of relationship satisfaction. *Social Psychology Quarterly*, 45, 177-181.
- Clark, M. S. 1981 Noncomparability of benefits given and received: A cue to the existence of friendship. *Social Psychology Quarterly*, 44, 375-381.
- Clark, M. S. 1984 Record keeping in two types of relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 549-557.

- Clark, M.S. 1987 Evidence for the effectiveness of manipulations of communal and exchange relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 12, 414-425.
- Clark, M. S., & Mills, J. 1979 Interpersonal attraction in exchange and communal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 12-24.
- Clark, M.S., Mills, J. R., & Corcoran, D.M. 1989 Keeping track of needs and input of friends and strangers. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 15, 533-542.
- Clark, M.S., Mills, J., & Powell, M.C. 1986 Keeping track of needs in communal and exchange relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 333-338.
- Clark, M.S., Ouellette, R., Powell, M. C., & Milberg, S. 1987 Recipient's mood, relationship type, and helping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 94-103.
- Clark, M.S., & Waddell, B. 1985 Perceptions of exploitation in communal and exchange relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 2, 403-418.
- Clark, M.S., & Taraban, C. 1991 Reactions to and willingness to express emotion in communal and exchange relationships. *Journal of Experimental Social Psychology*, 27, 324-336.
- Deutsch, M. 1975 Equity, equality, and need: What determines which value will be used as the basis of distributive justice. *Journal of Social Issues*, 31, 137-149.
- Lerner, M.J. 1975 The justice motive in social behavior: Introduction. *Journal of Social Issues*, 31, 1-19.
- Levinger, G. 1974 A three-level approach to attraction: Toward an understanding of pair relatedness. T.L.Huston (Ed.) *Foundations of interpersonal attraction*. New York: Academic Press. Pp.99-120.
- Lloyd, S., Cate, R., & Henton, J. 1982 Equity and rewards as predictors of satisfaction in casual and intimate relationships. *Journal of Psychology*, 110, 43-48.
- Matthews, C. & Clark, R.D., III. 1982 Marital satisfaction: A validation

- approach. *Basic and Applied Social Psychology*, 3, 169-186.
- Michaels, J. W., Edwards, J. N., & Acock, A. C. 1984 Satisfaction in intimate relationships as a function of inequality, inequity, and outcomes. *Social Psychology Quarterly*, 47, 347-357.
- 諸井克英 1983 不当な outcome の原因帰属に関する実験的研究 (1) — Lerner-正当世界仮説の検討 — 実験社会心理学研究, 22, 109-122.
- 諸井克英・小川久美 1987 対人関係への公平理論の適用 — 予備的検討 — 人文論集 (静岡大学人文学部社会学科・人文学科研究報告), 37, 15-40.
- Murstein, B.I., Cerreto, M., & MacDonald, M.G. 1977 A theory and investigation of the effect of exchange-orientation on marriage and friendship. *Journal of Marriage and the Family*, 39, 543-548.
- Peterson, C. 1981 Equity, equality, and marriage. *Journal of Social Psychology*, 113, 283-284.
- Rubin, Z. 1973 *Liking & loving: An invitation to social psychology*. Holt, Rinehart, and Winston. (『好きになること愛すること—社会心理学への招待—』市川孝一・樋野芳雄訳 思索社 1981)
- 斎藤友里子・佐々木 薫 1987 公正原理採択の規定因としての状況特性 実験社会心理学研究, 27, 79-87.
- Schafer, R. B., & Keith, P.M. 1981 Equity in marital roles across the family life cycle. *Journal of Marriage and the Family*, 43, 359-367.
- Walster, E., Walster, G.W., & Berscheid, E. 1978 *Equity: Theory and research*. Allyn and Bacon.
- Williamson, G. M., & Clark, M.S. 1989a Providing help and desired relationship type as determinants of changes in moods and self-evaluations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 722-734.
- Williamson, G.M., & Clark, M.S. 1989b The communal/exchange distinction and some implications for understanding justice in families. *Social Justice Research*, 3, 77-103.